

戦争論を究極の実践書に昇華させた不滅の兵法書であるばかりでなく、人間とは、組織とは、リーダーとは、国家とは、戦うとは…人間の本質を鋭く突いた哲学書「孫子」

二千五百年の時を超えてもなお
現実のさまざまな問題に
実践的に対処する知恵を得られる再生の書「孫子」

近代以降に日本人が読み継いできた代表的「孫子」の世界

「孫子」叢書

全25巻

別巻1

監修
湯浅邦弘

大阪大学教授

学術図書出版

大空社

「孫子」叢書

全25巻+別巻1

——これであなたもさまざまな問題解決の達人となれる——

ソリューション

「孫子」叢書

日本人にとって『孫子』とは

監修

湯浅邦弘

(大阪大学教授)

「彼を知り己を知れば、百戦して殆からず。」(謀攻篇)

この名句で知られる『孫子』の兵法は、クラウゼヴィッツの『戦争論』と並んで、世界最高の兵典と評価されている。今から二千五百年前の古代中国で編纂された『孫子』は、なぜ世界を代表する兵書となり得たのか。中国では、『孫子』に続いて多くの兵書が編纂されたものの、ついに『孫子』をしのぐ兵法は現れなかった。『孫子』は、中国兵法の突出した成果として君臨し続けたのである。

日本に伝来した『孫子』は、戦国武将にもよく読まれ、武田騎馬隊の軍旗として「風林火山」の言葉が採用されたことはよく知られている。明治維新以降も、日本が戦争の時代に入るとの並行して、兵学研究者や愛国者による『孫子』解説や訳注書が数多く刊行された。戦後は、一転して、国政運営や会社経営といった観点からも、『孫子』は注目を集めた。そして今も、『孫子』は依然として多くの読者を抱えている。それは、『孫子』が戦争の技術書であるにとどまらず、人間とは何か、組織とは何か、リーダーはどうあるべきか、戦うとはどういうことか、という根本的な問題を探る哲学の書だからである。後からじっくり効いてくる古典もあるが、『孫子』は、今すぐ現実社会に役立つ本だと言える。読んだその日から、人生が変わり、組織が活性化する本だと言っても良い。

こうしたすぐれた古典には、早くから多くの研究者が挑戦しているが、『孫子』を読むという行為は、今、どうあるべきなのか。この『孫子』叢書』は、この疑問に答えようとして企画されたものである。日本における『孫子』受容の歴史を改めて振り返り、我々日本人にとって『孫子』とは何だったのかを探るうとする試みである。日本が近代化をとげる激動の時期に、『孫子』がどう読まれてきたのかを振り返りたい。

この叢書により、『孫子』を受容した日本人の心と、その時代とをたどっていただきたい。そして、何より読者自身の人生にとっての大きな指針となることを期待したい。

(「発刊にあたって」より抜粋)

「孫子」叢書

全25巻+別巻1

収録の方針

- 一、明治以降、昭和の前半期頃までに刊行されたさまざまな特色ある『孫子』をできるだけ多く収録する。
- 二、研究的文献から注釈書、一般書まで、幅広く『孫子』の基本書を収録し、『孫子』の受容史をたどれるようにする。
- 三、それぞれの時代を映す鏡となつていような特色ある『孫子』を収録し、時代の雰囲気や味わうことができるように努める。
- 四、日本の『孫子』受容史をたどる上で逸せない明治以前の文献を選択し、現代の参照に適する資料とした巻を予定する。
- 五、収録書を中心に、『孫子』の成立、特色、内容、歴史から日本での受容などについて、資料や解題・目録などを交えた解説を「別巻」として用意し、本叢書活用の便宜を図る。

(1年に2回ずつ配本予定)

『孫子』とは何か

中国最高の兵法書

『孫子』十三篇は、春秋時代の兵法家・孫武(前六世紀末～五世紀前半、呉の王・闔廬に仕えた)の書き記した兵法書で、中国では『呉子』と並び軍事に携わる者の必読書として早くから名を馳せた。

最古の注釈は、『三国志』の英雄・曹操(一三世紀)による『魏武帝注孫子』、その後、唐を経て宋代(一三世紀)に『十一家注孫子』として諸家の注がまとめられた。同時に、『武経七書』(武人必読の七経典『孫子』、『呉子』、『司馬法』、『尉繚子』、『李衛公問对』、『三略』、『六韜』)として選ばれたが、以後今日に至るまで、中国兵法書の筆頭として不動の位置を保っている。世界最古の軍事思想書

古代から世界の民族や国家が戦史・戦記の類を書き残してきたが、『孫子』は具体的な戦争や王・將軍の実話・逸話からなる戦史ではない。西欧世界における軍事思想は十六世紀のマキアヴェリ『君主論』を嚆矢とし、ナポレオン戦争を経て十九世紀のクラウゼヴィッツ『戦争論』でようやく近代理論の完成を見たと言われる。遠く古代に完成の域に達していた『孫子』は、驚異以外のなにものでもない。



二千五百年前、中国春秋時代に生まれた小冊『孫子』は以後諸国で戦争・戦略論があまた産出されたにもかかわらず

世界に冠たる最高兵法書として、いまも君臨し、読み継がれている。戦争の技術論、戦いの手引書の枠を突き抜け、

およそ人間が顔をつき合わず全ての場所と時に、普遍的に有効な実践的行動の原則 「今、あなたは何をなすべきか」

「孫子」はそれを冷徹な目で見抜いた。そして簡潔な章句、竹を割ったように明快な表現に仕立て上げた。

わずか約六千字の漢字には実戦的処世の知恵が凝縮されている。

『孫子』十三篇 概要

計 (第一)	情勢判断、勝算を計るが要
作戰 (第二)	戦争は経済、スピードを持って戦わずして勝つのが最善
謀攻 (第三)	必勝の形を作る、守備は強力
形 (第四)	集団の勢い、正攻法と奇襲
勢 (第五)	主導権を握る、柔軟な機動性
虚实 (第六)	情報収集、先着争い、統率
軍争 (第七)	指揮官いかに、臨機応変
九変 (第八)	敵情観察、地勢に注意
行軍 (第九)	六種の地形、理想の指導者
地形 (第十)	迅速な進攻を、深く徹底的に
九地 (第十一)	五種の火攻め、戦争の止め方
火攻 (第十二)	敵情探知、間諜(スパイ)で情報戦
用間 (第十三)	

『孫子』の名句・名言

- ・ 『孫子』冒頭のことば 孫子曰く、兵とは国の大事なり。死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。故に之を経るに五事を以てし、之を校ぶるに計を以てして、其の情を索む。(計篇)
- ・ 兵とは詭道なり。(計篇)
- ・ 兵は拙速なるを聞くも、未だ巧久なるを睹ざるなり。(作戰篇)
- ・ 百戦百勝は善の善なる者に非ざるなり。戦わずして人の兵を屈するは善の善なる者なり。(謀攻篇)
- ・ 勝者の民を戦わしむるや、積水を千仞の谿に決するが若きは、形なり(形篇)
- ・ 夫れ兵の形は水に象る。故に兵に常勢無く、水に常形無し。能く敵に因りて変化して勝ちを取る者、之を神と謂う。(虚实篇)
- ・ 其の疾きこと風の如く、其の徐なること林の如く、侵掠すること火の如く、動かざること山の如く…(軍争篇)【風林火山】
- ・ 君命に受けざる所有り。(九変篇)
- ・ 始めは処女の如くにして、敵、戸を開き、後は脱兎の如くにして、敵、拒ぐに及ばず。(九地篇)
- ・ 夫れ呉人と越人と相悪むや、其の舟を同じうして濟りて風に遇うに当たりて、其の相救うや、左右の手の如し。(九地篇)【呉越同舟】
- ・ 主は怒りを以て師を興すべからず。(火攻篇)

挟み込みの見本もご覧ください。

『孫子』の魅力

『孫子』の評価

『孫子』を実際に読み、研究・評価し、また実戦に応用した(ないし理論を取り入れたと考えられる)世界史上の人物・事例は枚挙にいとまがない。本家中国では『三国志』の諸葛孔明、曹操、唐の詩人・杜牧、近く現代の毛沢東、いつぼう西欧ではイエズス会宣教師、ナポレオン、プロシア兵学、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世、現代ではイギリスの中国学者・軍事思想家、アメリカ海兵隊指揮官、等々、今日でも、西欧・アジアの軍事関係者から最高の評価を与えられている。J・ニードム(アメリカ科学史家)。

日本人と『孫子』

日本では吉備真備が唐から『孫子』を持ち帰った(八世紀)のが始め、源義家は兵法の師・大江匡房から受けた『孫子』の教えを後三年の役(十一世紀)の実戦に応用、戦国大名では武田信玄が旗印とした「風林火山」、江戸時代には徳川家康が官版「武経七書」を刊行、武士の教養に組みこまれ、また林羅山、山鹿素行、荻生徂徠、新井白石、吉田松陰と多くの儒者により『孫子』注釈書が出版された。明治になり、日露戦争海戦時に東郷平八郎が『孫子』を携行、等々。

永遠の哲学書

『孫子』は戦いの仕方を論じるが戦争の実例を語らない。あくまで合理から人間を究めた哲学書である。戦争を語りながら「戦わずして勝つ」を最上とする。争いの絶えない人間世界の聖典としてあり続けるに違いない。



現代に生きる普遍の実戦的行動の原則を掌中に！

「孫子」叢書

全 25 巻 + 別巻 1

発刊

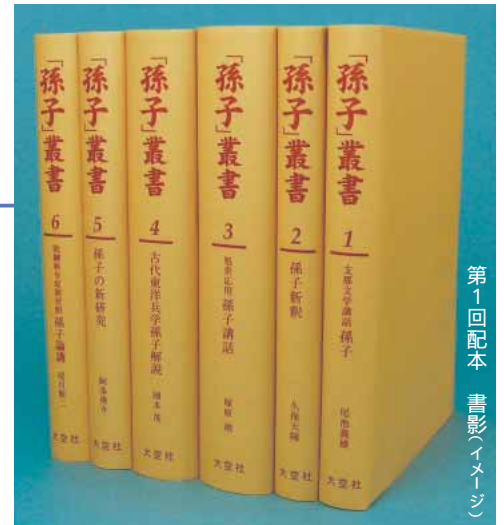
監修 湯浅邦弘 (大阪大学教授)



読んだその日から、
人生が変わり、組織が活性化する本「孫子」
人間の行動と心を熟知した永遠の哲学「孫子」
適切な判断と果敢な実行力を
現実生活に活かす卓越した知恵の宝庫
「人を動かす」「組織を動かす」
指導者たるべき判断の極意がここにある。

「孫子」を読む読まないで、
あなたの人生は大きく変わる！

勝負のとき、迷いが出たとき、失敗したとき、
再起を目指すとき、成功したとき... 「孫子」必読！



[体裁] A 5 判・上製・クロス装・総約 2700 頁

第 1 回配本 6 巻(第 1 ~ 6 巻) ISBN978-4-283-01277-6
揃定価(本体 95,000円 + 税) *各巻分売可

- | | | | | | |
|---|---------------|-------|-------|---------|-------------------|
| 1 | 支那文学講話 孫子 | 尾池義雄著 | 300 頁 | 01271-4 | 定価(本体10,500円 + 税) |
| 2 | 孫子新釈 | 久保天随著 | 250 頁 | 01272-1 | 定価(本体9,200円 + 税) |
| 3 | 处世応用 孫子講話 | 塚原靖著 | 730 頁 | 01273-8 | 定価(本体25,000円 + 税) |
| 4 | 古代東洋兵学孫子解説 | 岡本茂著 | 650 頁 | 01274-5 | 定価(本体23,000円 + 税) |
| 5 | 孫子の新研究 | 阿多俊介著 | 370 頁 | 01275-2 | 定価(本体13,500円 + 税) |
| 6 | 戦網典令原則対照 孫子論講 | 尾川敬二著 | 390 頁 | 01276-9 | 定価(本体13,800円 + 税) |

(2013 年 6 月刊) *以後、年 2 回ずつ配本予定

座右に
研究に

実業家・経営者・企業人・政治家・軍事関係者
歴史 / 古典研究者・歴史愛好家・『孫子』愛読者 ...

戦略・防衛・社会・教育・慣習・思想・宗教・アジア・倫理・道徳・教訓・ことば ...

『「論語」叢書』 配本中
『「菜根譚」叢書』 配本中
『「孫子」叢書』 発刊！

日本人の人生の指南書
日本の全図書館に
所蔵し活用を！

図書館必備 大学 / 短大 / 研究機関 / 研究者 / 公共図書館

発行 学術図書出版
大空社

〒 114-0032 東京都北区中十条 4-3-2
TEL : 03-6454-3400
FAX : 03-6454-3433
URL: <http://www.ozorasha.co.jp>
E-mail: eigy@ozorasha.co.jp

*お
取
扱
い

第1回配本 6巻(第1~6巻) ISBN978-4-283-01277-6 揃定価(本体95,000円+税) (2013年6月刊)

- 1 支那文学講話 孫子 尾池義雄(昭文堂書店、明治43)300頁 978-4-283-01271-4 定価(本体10,500円+税)
- 2 孫子新釈 久保天随(博文館、明治44)250頁 978-4-283-01272-1 定価(本体9,200円+税)
- 3 処世応用 孫子講話 塚原靖(東亜堂書房、大正5)730頁 978-4-283-01273-8 定価(本体25,000円+税)
- 4 古代東洋兵学孫子解説 岡本茂(偕行社、昭和4)650頁 978-4-283-01274-5 定価(本体23,000円+税)
- 5 孫子の新研究 阿多俊介(六合館、昭和5)370頁 978-4-283-01275-2 定価(本体13,500円+税)
- 6 戦綱典令原則対照 孫子論講 尾川敬二(菊地屋書店、昭和11)390頁 978-4-283-01276-9 定価(本体13,800円+税)

各巻6分売可

[体裁]A5判・上製・クロス装 *年2回ずつ配本予定

収録内容

見本縮小

全25巻・別巻1

現代に生きる普遍の実戦的行動の原則を掌中に!

戦争の語彙を現代の読者がそれぞれの立場・環境に置き換えてみれば、今、何をすべきか、いかに考えるべきか、有効な指針が見えてくる。

第1巻 支那文学講話 孫子

[尾池義雄著、明治43] 明治末に刊行「支那文学講話」シリーズの一冊。序文に「孫子は兵経として不朽であるが、亦た文章としても不朽である」と、その内容・文章を高く評価する。「前記」として「孫子及び其の時代」孫武と孫子「孫子と類書」について解説し、本文は、訓点(返り点・送り仮名)を付した原文を掲げた後、平易な解説を施している。従来のカタカナ表記を脱し、漢字・ひらがなを使っている点に、時代の進展をみることができる。

虚實第六

虚實第六

虚實第六は軍の備立の内部の状態をいふので内部の空虚にして堅からざるを虚といひ内部の充實にして堅きを實といふので普通の場合なれば智將の備は實愚將の備は虚であるが時によると智將もわざと虚となり愚將も期せずして實になることがあつて勢を以て之を制する時は虚實は變化して止まぬものである。しかし敵の如何に關せず務めて己を實にするは軍の本體といふべく、謀を以て敵の實を變じて虚となし我が虚を實にするは軍の妙用で、この篇は、彼

孫子曰凡先處戰地而待敵者佚後處戰地而趨戰者勞故善戰者致人而不致人能使敵人自至者利之也能使敵人不得至者害之也故敵佚能勞之飽能飢之安能動之出其所必趨趨其所不意

九〇

虚實篇(第六)冒頭 虚(空虚)は備えがない、実(充實)は準備が十分なこと。身方を実に、敵を虚にするのが戦いの基本である。

いふものである。

天者、陰陽、寒暑、時制也。

二の天といふのは、之れを悉くいふと、陰陽とて曆の五行の相生相尅や、寒暑とて冬季の寒いときと、夏の暑いときや、時制とて彼の陰陽寒暑に對する用意等である。

地者、遠近、險易、廣狹、死生也。

三の地といふのは、地の利といふことであつて、其の地形には、緩々押しかくべき遠いところ、と急速に襲撃すべき近いところ、と歩兵を用ふべき難處と騎馬を用ふべき平地と、大軍を以て對すべき廣闊な場所と、小勢で突撃すべき狹隘な場所と、それから退きもならず進みもならず、絶體絶命、死を堵して闘はねばならぬ死地と命は安全で、唯だ守つて居りさへすればよい生地と、八ツの辨ふべき區別がある。

將者、智、信、仁、勇、嚴也。

第二本 孫子 始計第一

計篇(第一)より 『孫子』冒頭、戦争に際して熟慮すべき「五事」道・天・地・將・法について。たとえば「將(將軍)の資質として才智・誠信・仁慈・勇敢・威嚴。五事および七計(目算)の深い理解があるかないかで、戦わずして勝敗は見えている。

第2巻 孫子新釈

[久保天随著、明治44] 著者は明治~昭和前期の漢学者(1875~1934)。久保は台北帝国大学教授なども務めており、他にも「新釈」と称する古典注釈書を刊行しているが、この書では、「多少漢学の素養あって、支那古典を研究せむとするものに便す」ことを目的とした。そのため、訓点を付した原文の後に、それぞれ詳細な「字解」「文義」「余論」などを付し、また、参考として「孫子紋録」を巻末に付載する。

学術図書出版

大空社 発行

第4巻 支那文学講話 孫子

[岡本茂著、昭和4] 著者は陸軍輜重兵大尉。陸軍運輸部青島出張所附として中国山東省に從軍中、研究を重ねて執筆したもの。巻頭言に「孫子の我国に伝はりし由来」我がかながら隨神の兵学は孫子兵学と一致」と題する解説があり、また、『孫子』を東洋兵学の代表として、近世兵学(西洋兵学)との対照表を付けている点に特色がある。本文は、原文を掲げた後、「訳読(書き下し文)」「訓釈」「解釈」「評論」からなる。

九変篇(第八) 將軍にとつての五つの危険なこと。決死であつてはため、臆病、気短かも、屈辱を受け流せないのも、兵を愛しすぎるのもまずい。

廉潔は辱かしむべく、民を愛するは煩はすべし、凡そこの五者は將の過なり、兵を用ふるの異なり、軍を獲し、將を殺すは、必ず五危を以てす、察せざるべからざるなり。

【訓釋】「五危」とは五異なり、主將たる者の性癖によつて、軍を破られ陣を亂さるるが如きの異あるを云ふ。

「必死」とは血氣の大將にして勇なるも多くは智に乏しく志を行はんとして必死となる者を云ふ。

「必生」とは臆病の大將にして生きんことをのみ希ふ者を云ふ。

「忿速」とは暴怒し易きの主將を云ふ、性厚重ならず忿念の急速なる者なり。

【解釋】凡そ大將たる者に五つの性の偏あり、此偏の爲めに敵に擊破せられ又は擾亂

孫子論議 三二八
まじり用間に終る、盡く國家民人の福利と云ふ事を基調とし、戦争の慘害を少くして、國是を貫徹せんと考へてゐることは、真に敬服すべき態度であると思ふ。
曹操は、戦は必ず同謀を用ひて以て敵の情實を知るなりと註し、張璠は、素と敵情を知らんと欲する者は間に非れば不可なり、然れども間を用ふるの道は尤も須らく微密なるべし、故に火攻に次ぐと註してゐる。
孫子曰、凡與師、十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、内外騷動、怠於道路、不得操事者、七十萬家、相守數年、以爭一日之勝、愛爵祿百金、不知敵之情、者不仁之至也、非人之將也、非主之佐也、非勝之主也。
【譯讀】 勢頭、先づ戦費は老大な額に上る事から、敵情を諒知することが出来なければ

軍争とは、戦闘の上の競争である。即ち手順よく巧みに進退して、何事も敵に後れぬ機、負けぬ機と競ひ争ひ、以て勝利の結果を得る術を云ふのである。其からして此の「争」の字を、此處では「戦引」とは譯す。便ち前の兵勢や虚實の諸篇は、専ら用兵の理を論じたもの、此の軍争の篇は、首として實地の進退を説いたものだからである。此篇には迂直之計と云ふのが有る。迂路をして其が直路に爲ると云ふ、一寸と手品めいたる語であるが、其れが又た實際然り行く計がある。行軍の六法と云ふがある。彼の有名な、如風、如林、如火、如山、如塵、如雷、如雲、の六つである。其外、耳目と、氣と、心と、力と、變との治ひ方。八變の禁物等、用兵の上にも、處世の上にも、最も重要な文字が多かる。
一轉「戦引」だの「戦引」だのと云ふ文字は、甚だ面白からぬ意味の文字で、其の反對の「平和」とか「正直」とか云ふ文字ほどに、美的や道義的の觀念を起させぬ。處ろが何故か生物、特に人には、此の觀的、非道義的の觀念即ち詭計なるものが附て随つて、寢た間も其の境界から脱出すると云

第3巻 処世応用 孫子講話

[塚原靖著、大正5] 「孫子は僕の先生である。世渡りの師匠である。身体の保護者である」という書き出しから明らかなように、『孫子』を自身の処世の書として解説しようとするもの。訓点を付した原文の後に「講話」の形式(総ルビ付き)で解説を施す。『孫子』を処世の書と考えるため、時に原文の意から大きくはずれたり、筆者の体験や私見が入ることもあるが、『孫子』が単なる高等兵学の書ではなく、個人の処世術として応用が利くことを示している。

軍争篇(第七) 敵の機先を制することが肝要。「迂直(うちやく)の計(遠回り)を近道に転ずる)を知る者が勝つ。

孫子の新研究 二七八
なつたが、其時莊公が齊の桓公と會見して壇上に講和條約調印の際、亂暴にもじ首を執て突如桓公を其場に脅迫し、遂に自分が敗戦の爲め失つた魯國の領土をましまし返還せしめんと云ふ支那式の勇者である。
故善用兵者、譬如率然、率然者常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。
故に善將の兵を統率するや軍をして恰も夫の猛蛇率然の如き態あるに至らしむるは其手腕である、率然は常山の蛇類で、性極めて猝猛、首を撃ては尾にて逃襲し、尾を撃ては首にて反噬し、中を撃ては首尾一所に給み來ると云ふ難物であるが、兵も亦上下相和し、左右相助け、死生共に相應すること、必ず此の率然の如くならしめざる可らずと云ふにある。
因に
此一節は文章としても古來有名なるものなるが、其精神は我が戦闘綱領に協同一致へ戦闘ノ目的ヲ達スル爲メテ重要ナリ、兵種ヲ論セス上下

第5巻 孫子の新研究

[阿多俊介著、昭和5] 執筆の根本的な動機として、当時、漢文学の伝統が不振に陥り、文字の素養が衰退したことをあげる。西洋文物の輸入に汲々として漢字排斥論さえおこっていることを遺憾としている。そして、魏の曹操の注を初めとする十家注を総合的に検討し、江戸時代の儒者がなしえなかつた新見解の提示を試みる。さらには、ドイツのホルマル・フォン・デア・ゴルトツやクラウゼヴィッツの兵学理論なども参照する。

第6巻 戦綱典令原則対照 孫子論講

[尾川敬二著、昭和11] 著者は陸軍教授。江戸時代の漢学者による注釈には隔靴搔痒の感があつたとし、当時の戦法軍規に具体的な例証を求めて『孫子』を解釈する。まず、「孫子は支那唯一最古の兵書なり」「孫子は完書にして自撰なり」などの解題を付け、次に訓点付きの原文を掲げ、頭注と通釈と語注によって意味を説き、さらに「教育令綱領」「内務書綱領」などの各種軍規、日露戦役などの戦史を参照して詳細に解説する。

學術図書出版
TEL : 03-6454-3400
FAX : 03-6454-3433
URL: www.ozorasha.co.jp
E-mail: eigyo@ozorasha.co.jp
発行 大空社